





日本現代文學全集・講談社版 93

中島健藏 桑原武夫
中野好夫 竹山道雄
高橋義孝 竹 內 好 集

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉

日本現代文學全集

93

中島健藏・桑原武夫
中野好夫・竹山道雄 集
高橋義孝・竹内好

編集
伊藤整
藤勝一郎
龜井勝一
中村光夫
平原野謙
山本健吉



昭和43年4月10日 印刷
昭和43年4月19日 發行

定價 600圓

© KÔDANSHA 1968

著者
なか中 桑原 野山 高橋 竹内
けん健 武好 道義
ぞう藏 夫お 夫雄 孝好
じま島 原の 野やま 山し 橋う ち内

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽2-12-21
電話東京(942) 1111 (大代表)
振替東京 3 9 3 0

印刷 大日本印刷株式會社
製版 株式會社 興陽社
製本 株式會社 大進堂
製函 株式會社 岡山紙器所
背革 株式會社 第一紙藝社
表紙 株式會社 石井
口繪 日本クロス工業株式會社
用紙 日本加工製紙株式會社
本文 本州製紙株式會社
函貼 安倍川工業株式會社
見返し 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取り替えいたします。

中島健藏集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

書簡——Xへの手紙……………七
 才能について……………三
 個人の歴史について……………六
 自分のこと……………六
 生い立ち……………元
 青年の心理……………三
 知識階級の運命……………七
 藝術における新しさの意味……………四
 長篇小説「自畫像」はしがき……………三

危険な情況……………五

ボードレール私見……………六

作品解説……………小田切秀雄 三六

中島健藏入門……………小田切 進 四〇

年 譜……………四二

参考文献……………四三

桑原武夫集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

ラシーヌへの道……………六

三國志のために……………七 中野好夫集 目次

第二藝術……………六

傳統……………三

河上肇『自敘傳』……………九

啄木の日記……………一九

明治の再評價……………二六

藝術の社會的效果……………二九

揚州八怪から……………三三

作品解説……………小田切秀雄三六

桑原武夫入門……………小田切進四〇

年譜……………四六

参考文献……………四三

卷頭寫眞

筆蹟

孤高の精神……………三九

二つの文學……………一四

森鷗外……………一四

秋聲の描く女……………一五

諷刺文學序説……………一六

近代文學の運命……………一七

浪漫主義……………一八

私の信條……………一九

幸田露伴……………一三三

オランダの訪問……………一三五

作品解説……………小田切秀雄 四〇

作品解説……………小田切秀雄 四一

中野好夫人入門……………小田切 進 四六

竹山道雄入門……………小田切 進 四九

年譜……………四三

年譜……………四六

参考文献……………四三

参考文献……………四四

竹山道雄集 目次

高橋義孝集 目次

巻頭寫眞

巻頭寫眞

筆蹟

筆蹟

スイスにて……………二〇

トーマス・マンのフロイト論……………二七

ベルリンにて……………三三

補説・ルカーチュ『上部構造と

『しての文學』に對する批評……………三六

藝術と進歩……………三四

死と日本人……………三七

作品解説……………小田切秀雄 四〇

高橋義孝入門……………小田切 進 四〇

年譜……………三三

参考文献……………四四

中國人の抗戰意識と日本人の

道德意識……………三五

権力と藝術……………三六

近代の超克……………三六

周作人から核實驗まで……………三九

作品解説……………小田切秀雄 四〇

竹内好入門……………小田切 進 四二

年譜……………三七

参考文献……………四四

竹内好集目次

卷頭寫眞

筆蹟

中島健藏集

美言
信

健生書

書簡

— X への手紙 —

半作家の運命

世界大戦後の精神的危機におけるヨーロッパのある種の脳髓の錯亂状態は、ヴァレリーが『精神の危機』の中に明確に描いています。その後約十五年の今日、いよいよ世界的となり、いよいよ麻痺的となつて来た錯亂、ことに、日本の文藝界の裏に見える一状態は、この二月十四日の讀賣新聞に出た河上徹太郎君の質疑、「懷疑精神は何處に行くべきか、」の中にかなりはつきり出ていると思ひます。そのままここに寫して見ましよう。

「現代の若い文藝家の中にも、自分の藝術の領域・限界・方法等を明確に把握して、之に向つて一路邁進する人が可なりある。それはそれでよい。併し現代の精神史上の階段、日本文化の特殊な状態、或は理智や感性やモラルの個性的な要求に促がされて、徒らに自己求心的になり、藝術的な仕事に關するあらゆることを知り過ぎ、意識過多や懷疑に悩む一群の若い人々が少くないのも事實である。特殊の天才は特殊の行き方で、それから救われる。ジイドやヴァレリー(或る意味で横光利一氏)がそれだ。併し特殊の行き方はそれ

だけの存在であつて發展や應用を許されないし、殊に大多數は方法の皆無というよりは過剰に苦しみ、胃酸過多症の如く、批判精神のみ發達して却つて藝術上の餓を感じている。かかる時辿りゆく道は、造型性を得ぬ懷疑精神が一種のデカダンスに陥るか、反省が昂じて自己狹窄になるか、或は空漠たるディレタンティズムに走るしかない。

之は文壇的には表へ現れぬから部分的に見えるかも知れぬが却つてそれだけに深刻な問題である。

此の際マルキシズムは一種の救いとも思える。併し藝術方法史的には餘りに後天的であり天降りのである。私には既成藝術の方法それ自身から發展した方法しか此の場合認められない。この現代の錯亂が如何なる點に行きつくか? 之に處する懷疑家の如何なる態度が最も正直で健全か? 此の點につき谷川徹三氏あたりの教を乞いたう。

この質疑は、河上式にひどく無愛想なものだ。われわれにはあの無愛想が一つの魅力なのだが、ことにマルキシズム云々の條がひどい。そこに谷川氏が引つかかられたものと思われませんが、氏は、ブルジョア藝術とプロレタリア藝術に關する感想を述べ、轉換の困難(右から左へです)について辯護し、最後に、懷疑がむしろ頼もしいものであると結んでおられます。

わたくしは、河上君の質疑の中心點が「藝術上の餓」ということばにあるのだらうと思う。そこで第一に起こつた疑問は、河上君自身がこの餓を感じているかどうかということでした。今日までのわたくしの觀察では、どうも河上君には餓えが少なそうだ。というわけは、この質疑によつてすぐに感じられたものが「書かずに悩んでいる半作家」という一つの型だつたからです。河上君にこういう不景氣な悩みは少なそうだ。これは珍らしいことだと思ふ。もちろんこの餓えは、よい作品が見つからないと云つてつまらながつてゐる讀者の側のものではない。また、全く創作する氣のない評論家や

學者とも縁の少ないものでしよう。その意味から河上君がこういう質問を谷川氏に發したということ自身が少々皮肉なようにも思われる。もしこの兩氏に將來創作をものされる意志があつたら取り消しものですが……。

書きたいという氣はある。しかし書けないという以上に書かずにいる。そうかといつて他に何をするでもない。怠惰にもいろいろあつて、おれは怠けたいから怠けるんだとか、怠けるほかはないから進んで怠けるんだとか、必要だから怠けるんだとか、へたな勉強家よりも痛烈な怠け者がいる。しかしかりにわたくしが半作家と呼ぶ問題の人物は、それほど覺悟があつて怠けているわけではない。理屈はかなり多くて深刻なことをいうが、どこかに高をくくつたところがあつてしかも卑屈だ。

もう少し良いばあいを舉げるならば、半作家のある人々は大まじめです。他人のすぐれた作品に打たれるだけの謙讓な感性も持つています。しかし、心の底に、どうしても打たれるだけでは氣が濟まないものが動いている。ある種の作品は、讀者に對して創作に等しい、あるいはそれに比し得るような協力を要する。また、おそらくはすぐれた作品を読んでゐる方が、つまらぬ創作に骨折るよりも得策だという氣があつて、強いても落ちつこうとするのだが、それでは物たりなくて、そこに餓えを感じる。そうかといつて書こうという決心がつかないのです。もちろん、いくら書く決心をしたところで、書けないものは仕方がない。しかし、書くという決心がはつきりついでいさえすれば、ここに云う半作家とはだいぶ色合いがちがつてゐるでしょう。そういう人たちは書くための勉強をすればよい。失敗しようと思われようと、あるいはついには書き終わろうと、當人としてはやむを得ないところだ。半作家はそこまで行かないのです。多くのばあいは、一度か二度くらいは書いた経験があるのですが、もちろん失敗してゐる。そのうち遲疑しながら次第に制作

欲を失い、一方多分の末練をかくして白々しい内生活の日々を送つてゐる。全く書く氣のない人々と、斷じて書く氣でゐる人々との中間にいて、要するに書かずに（書けずに、とは少しちがいます）いるのです。こう描いて行くと、大へん卑怯な臆病者のようですが、これは青年期には案外例の多い正常の状態だともいえましよう。文學青年の眞面目にもおちいらす、十分文學は愛好してゐるが、まず遠慮深く讀者の側に立とうという人は大勢います。その熱度の少し高い人が半作家になるのです。普通ならば時とともに文學熱が薄くなり、あるいは他の方向に情熱のはけ口を見つけ出して、あえて思いきりの悪い餓えなどには惱まなくなるのですが、たとえ眞似ごとでも創作の醍醐味を味わうと、得て半作家になりがちだ。おそらく経験からいつて文科の學生にもつともそれが多かるうと思ひます。そういう人が實際にゐるものとして、もう少し想像をつづけましよう。

彼は、半無意識的な初期の創作をよして以來ほとんど筆を執らずにゐる。しかし彼は熱心に文學を愛しつづけ、最大の關心と渴仰とを文學の上におきつづけ、勉強なり研究なりによつてもかくもなんらかのつながりを文學に持ちつづけてきました。彼は相當に確實な批判力を養ひ、作家の心理、制作のからくりにも通じてきた。そしてとてもくわだて及ばないような古今の大作家に頭を下げ、自分の才能を思つてはがつかりする。大物喰ひの癖があつて、いつも自分に失望しながら、實は全く絶望しきつてもいない。彼にとつては、文藝は一種の偶像です。自分とのつながりはだんだん切れて、文藝というものが高い所に昇つていくのですが、こうなると彼の憧憬は同化の道を失つて曖昧となり、自分にとつての方法であるはずの文藝が、感情的にはきわめて明確らしいが、實は掴みどころのない漠然たる憧れの的になつてしまひます。當然、少なくとも一時的の現象として餓えが起るでしよう。しかし大ていのばあいは、衰えつつある制作への憧れがいつそう薄れ、生活の自發性が薄

弱となるに従つて、現在の彼の餓えや苦惱は消失してしまうのが例です。彼は、はじめのうちは自分が何か「あたり前」でないような錯覚を起こしているのですが、このままで行けばやがて文學好きの普通人ができあがつて、ディレタンティスムも大して苦に文學好きは當たらず、妙な空漠感を起こさずにも當たらない當然の歸結となるでしょう。これが半作家のもつとも普通な運命です。創作の必然性についてはいろいろ議論があるが要するに純粹強烈な創作欲の存在が第一の要件です。創作欲の缺乏による衰弱はなんとしても救う道がありません。また、こうなつたからといつて泣くには及ばない。今の日本の文學にとつては、すぐれた作家が必要であると同時に、すぐれた讀者が實に必要なのですから……。もしディレタンティスムがあくまで空漠感を誘ひ、藝術上の餓えなるものが苦惱の原因となりつづけたとすれば、創作欲が死にきれないのだということになる。死にきれずにまごまごしている辛さが常態となることを恐れ、そのために内生活が白々しくなるのがやりきれないというならば、道は二つです。その衰弱した欲望を生かして強化あるいは變質させるか、つまり創作の實行といつそう深い因縁を保つ工風をするか、あるいは、瀕死の欲望の本據を衝いて死を早めるかです。後者ならばいうことはない。諦めるのがいちばん早道だ。

當然次に來る問題は半作家の欲望の強化、あるいは變質ということになる。それには創作の實行がいちばんの早道でしょうが、ずぶのしろうとではなし、いろいろ心得があるだけに、そう簡單にはいかない。問題は厄介至極な、「可能」にからんで紛糾する。大きな仕事を残して大往生を遂げた人々は、全く不可能な空想と、實現が可能な計畫とを、普通人以上に嗅ぎ分ける能力を持つていたらしいと思ひます。月世界旅行くらいならまだしも、火星へ行つたり、太陽へ行つたりするようなことをただぼんやり考へて、そうかといつて、本氣でロケットを作つている人々の愚をわらつてやまない人がいる。自分の狭い考へで、少しでも腑に落ちないことがあると

すぐ嘘だと斷言し、まるで相手にしない人がいる。こういう心を俗人根性というのですが、現在では、常人でもなおかつ possible の視野がおそろしく廣くなつています……。文藝的にいうと、すぐれた半作家は、物を知つているだけに大きな possible の見とおしをつけることが容易だ。possible の視野がだだつ廣くなるとともに、自己の實現、つまり行爲との差がますますひどくなつて、思いどおりに行かないという氣もちが強くなる。そして色眼の使い方がいそがしくなつてくる。從つて生活が空疎になり、行爲が行き迷つてさまざまな精神的過剰が猛威を振ひだす。こうなるとも、實は生活全體の大問題で、文學どころの話ではなくなるかも知れません。そういう時、「文學即生活、生活即文學」という誘惑的なことばが目の前にちらつくだろうが、そんなことがいえるくらいなら、はじめから全部の問題が解消だ。

彼にとつての問題は、創作欲を持ちながら、刻一刻創作の實行と離れていく苦痛に堪えきれなくなつて、なんとかして、自分の情熱と創作とを直接に結びつけようとするところにある。彼はまだ實行していない。従つて、何かできるだろうと思ふ心が抜けない。そして一種消極的な自由を持ちあつかつてゐる。無理數や虚數は必要によつて發明されたものだが、彼の心の中には、用途のない無理數や虚數がうようよしてゐる。一種名狀すべからざる内的相剋の破綻を生じないまでも、生活が白々しくなるのは當然のことです。こういう錯亂は、だんだんに彼を停頓状態におとし入れて、ますます創作の實行から遠いところへみちびくでしよう。河上君の質疑の中には、この状態にある精神の姿がよく出ています。自己の錯亂の觀照によつてデカダンスを免れ、むしろ進んで一種の自己狹窄に飛びこむのもこれから救われる一つの道でしよう。ところが、これも、大抵の場合、精神の硬化という不可避的な經過によつて長くはつづかずに消失する。そしてここにもまた一人の常人ができあがる。半作家の特徴は、「あたり前でない」という自覺があるだけで、實證的には實にあたり前な點にあります……。もう一つ進んだ行き方があ

る。まず極度の自己狹窄におちいり、やりきれなくなつて次にはひどいデカダンスに落ちこむという筋だ。これはきれいな事以上の悖徳を犯さざるが如くです。時には全く反射的な生活混亂にさえおちいることがある。そしてそのまま話がおしまひになつてしまふか、動きのとれないモラルの難問にぶつかるか、道は二つに分かれると思ひます。そこでほんとうに苦しむなら一時的にせよ文藝などは捨ててしまふがよい。

さていよいよ最後に、そうなつてもなお文藝が捨てきれず、むしろ、改めて創作によつて救われようというばあひが残る。しかし、依然として、あまりに大きすぎる可能の見とおしと、すでに成熟した批評精神とによつて、彼の困難は想像以上でしよう。たとえていへば、彼は身長の数十倍ないし数百倍の長さのある觸角を持ちながら、かえつて足もとには觸れ得ないで歩行の自由を失つてゐる蟲のようなものです。ここまで來たら、歩くほかない。足を動かすほかない。彼が渴仰してゐる天才の足は、彼の觸角の届く範圍よりも、はるかに狭い範圍を歩いてゐたのかもしれない。あるいは單に、眼で見ただけかもしれない。彼にも足や眼はあるはずだ。五十歩百歩の差というが、重大なのは五十一歩、百一歩という一步の差だ。各人のうちに正しくそれを認め得る能力も大せつなものの一つでしよう。

いかにも彼は、「他に爲すことを知らず、爲すことを欲せず、事實爲し得ない」からこそ作家になつた人々とはすつかり違つてゐる。同時に依然として、彼の救われる道は、「自分の藝術の領域・限界・方法などを明確に把握」するか、「特殊な行き方」それから脱するか、二つしかありません。彼はおそらく、一種の降下を必要とするでしょう。本質的に自分の身につけてゐるものだけの世界へ戻る必要があるでしょう。彼は、きわめて凡庸人に近いのです。「特殊な行き方」ができるためには天才が人用だ。

天才とは可能を實現に轉ずる力のことです。古めかしい宿命觀に

溺れていないかぎりまた「人間の可塑性」について多少なりとも考察し、經驗したことがあるならば、テスト氏の「天才は容易だ」ということばとも全く無縁ではないかもしれない。彼はヴァレリーではありませぬ。しかしいたずらに熾烈な彼の欲望にとつては Mature (成熟せよ) という聲がやはりいちはん適切に響くかもしれない。以後は各人の「特殊」の問題で、とにかく情熱や欲望は落ちつき場を得ることになる……。最善のばあひには、ここに全的な生活がはじまり、一種の古代人が、現代精神と結合して復活し、書くこともまた、登山のように、莫大な努力を伴う不逞な喜悅となるかもしれない。

深田久彌君は、雅川澁君に會うと、「とにかく書け」というそうですが、雅川君に限らず、こういうことばを突きつけられて笑いきれない人は大勢いそうだ。そしてこの手紙に多少の縁がありそうだ。何もわたくしは利口そうに高い所から見て氣のきいた事をいおうとしたわけではありませぬ。わたくしもまた、多かれ少なかれこのような危機の中に呼吸し、小聲で同じような質疑を放ちたい一人です。河上君の示した錯亂の一状態が、わたくしの中にシメールを生んだのでないかぎり、また、わたくし自身、誤つて厄介なシメールを描いたのでないかぎり、ここに並べたいつかの結末のうち、どれかに行くほかやはり道はないと思つています。

(一九三三年春)

盛夏放言

文藝の創作にも當然「習作」が必要だらうと思ひます。これは、相當自信がついてからも怠つてはならないことでしょう。今のジャーナリズムは少し知られた作家にたえず展覽會作品ばかり要求して

習作の暇を與えない。作家はやむを得ず、習作とも仕上げの作品ともつかないものを出してその日暮らしをするようになる。習作とはたとえバスケッチです。おそらく同人雑誌は、絶好の習作展覽會場でしょう。長篇を書くためには長篇の習作も必要だ。後になつて習作が光ることは望ましいが、さし當たりはそんなことを考えずに勉強する方がよいと思ひます。われわれの持つている創作のモティヴの中には、いつたんやりそこなつたら、二度とくりかえしのきかない性質のものがある。そういうモティヴは大せつにすることだ。本格的にそれに取りかかる前に習作という氣もちで勉強をして慎重に肉のつくのを待つことだ。ノートなども不精をしなれで取ることだ。

「わたくしはほんの習作のつもりで長篇小説を七つ書いた。一つは對話を學ぶため、一つは描寫を學ぶため、一つは人物をまとめるため、一つは構想のためという風に……」

このバルザックのことばは、拙劣な初期小説に對する彼の辯解なにし敗け惜しみばかりでもありません。デッサンの勉強を怠つた大畫家が考えられないと同じく、バルザックほどの作家ならば、あらかじめ習作のつもりで多くの長篇小説を書いたとしてもふしぎはなからう。また一方考え方によつては、出來の惡かつた初期の作品を、「習作」と考へて筆を捨てなかつた心意氣がわたくしには嬉しいのです。

つねに傑作を書こうという心組みは作家として當然のことです。しかし、二三の小佳作に得々とする人々はもつてのほかとして、日本の若い文藝家は、あまりに早くから傑作を書こうとあせりすぎてはいないでしょうか。たまたま書いた二三の拙作に對して、あまりに早く氣を腐らせすぎはしないでしょうか。彼らに共通の嘆きらし作品の難産の原因も、一つには準備行為の不足にありはしないかと思われまふ。

いかにも早熟の天才はありましよう。また長年の無爲放心によつて腕の鈍らない大家もいまましよう。しかし、普通の作家の大部分

は、すでに前者ではなく、後者というには未だ遠いのです。文藝のみが習練を要しないはずがありません。すでに志を立てた以上、石膏なり人體なりに向かつて木炭を握る氣で、短くとも百枚前後の習作何篇かを作る氣もちがあつて然るべきだと思ひます。フローベルは、「金貨を小錢に替へて小出しにしてしまつてはいかん」といひ、ボードレーは「ノートの中から純一の表現を求めようとするのはエネルギーの浪費だ」といつているそうですが、これはけつして無爲に化することを説いているのではありますまい。「習作」という氣もちを、結局、この訓戒の裏書きによつても、浪費を避ける一つの鍵だといえましよう。こういうことばに甘えて怠けることこそいぢばんおそろしいと思ひます。

石膏によるデッサンの勉強には、創作的なモティヴがほとんどありません。個性的な歪曲もできるだけ避けるべきです。こういう修業は、むしろ小中學校時代の作文によつてひととおりはすむはずなのですが、自分の経験からいつても、教師に指導者たる資格がないばあひが多くて身につけません。もちろん創作としての價値は問題になりませんが、廣津和郎氏のいわゆる「長距離競争」に志す人人とつては、こういう修業のやりなおしも全く無駄ではありませんまい。逆に、多くの群小既成作家の慘澹たる行きづまりないし失墜の原因の一つが、習作を怠り、デッサンの修業を忘れたところにあるとさえいえそな氣がしています。畫の方の色彩は、小説で云えば肉付けですが、これはなおさら修業を怠つてはならないことです。本の題も著者の名も忘れましたが、ある通俗な畫論の中で次のような意味のことばを讀んだことがあります。「三年なり四年なり勉強して身についたデッサンの素養は容易に消えないが、色彩はたえず習練していなければすぐ駄目になつてしまふ。」

非常な意氣組みと努力とをもつてわれわれと同年輩あるいはそれ以下の若い作家が小説を書く。若いというのは斷じて輕蔑の意味ではない。強みだ。すぐ雑誌に發表する。讀んで見るといかにも創作

のモティヴはわかる。骨組みもできている。しかるに全体の印象として實に生彩がない。四五十號くらいのカンヴァスに向かいながら、やつとデッサンでよごすのが精一杯という頼りなさを感ずる。こういう作家は、もつと本式の習作を重ね、創作のモティヴを大せつにする必要があるのではないかと思います。一生の力作は、そうやすやすとできあがるものではない。ある意味から、できるだけ本格的に書きつづけるのも必要でしょう。しかし、ある時期が来るまでは、「對話を學ぶため、描寫を學ぶため、人物をまとめるため、構想を學ぶため」という風に腰を据える必要がありはしないでしょうか。

文藝の創作はけつして奇蹟ではありません。いかに深刻に眉をひそめ、髪を長くし、口先の議論に熱中しても、「書く修業」を怠つて傑作ができようはずがありません。天才を云々する小生意氣な若者が天才であつたためしはない。天才ならばとつとに傑作を書いているはず。同時に、手を束ねて日を送れば凡庸以下となるに相違ない常人も、替々と修業すれば、できそこないの天才より確實に、「自分の書きたいもの」を書き得ることも確かです。こういうことは實に平凡な常識ですが、最上の倫理はつねに平凡だ。それを厚顔に忘れてるのが似而非文藝家です。いや、それがあらゆる似而非者の特質だ。彼らの口もとには常に高をくくつた冷笑が醜くこびりついている。何も勉強しないでいるくせに、彼らは「二三の小佳作に自足して依然として自分を作家の一種だと思つている。いつかは傑作が書けそうに思つている。なかなか作品が書けないのはあたり前のことだが、實はその書けない間がいちばん大せつな準備の時期なのだ。もちろん、絶えずペンさえ握つていれば勉強になるという意味ではない。眼の修業も心の修業も筆の修業以上に必要だ。ただし、たえず、未だ形をなさぬライフ・ワークを心におくということ。そうしてそれに向かつて自分のすべてを集中するということ。

とです。けつしてそのため生活が白々しくなるものではない。へたに休息すれば、すぐにたががゆるんでしまう。ゆつくり腰を据えると同時に、たえず緊張を保つことが必要です。たとえ相當に自信のある作を書き得たところで、それがみごとならみごとなだけ、次の傑作の足場にはならない。いかにして新しい出發點から次の作品に入るかが問題だ。従つてすでに修業時代を過ぎたように見える人々も、結局たえず修業を強いられるのです。

實は、この心組みは文藝の創作に限つたことではない。生活全體についていえることだ。ただ生きている生活と、充實した生活とのちがいは、生きていることに甘えるか否かによつてできる。作家という手前勝手の看板を上げ、そのかげにかくれて非作家の生活をするのが悪いように、生きていることに安心して生活の充實を忘れるのはわれわれにとつていちばんおそろしいことだ。つねに肩をいかにせていても仕方がないが、生活の白々しきに安んずるのは、今のわたくしにはなんとも助からないことのように思われる。

この手紙は何もあなたがそうだからといつて書いてるわけではありません。假想敵はもちろん自分自身だ。こういうことは、やはり一應断つておかないと、妙なことになる。おれはちがうぞとか、手前は全體何をしてるんだとか……。少なくともわれわれはもつと率直に語り合いたい。中途半端な作家氣取りの甘えの中に便と休息するののもつとも悪いのだ。いつそ休むなら作家氣取りをやめ、何かほかのことで心の張りを保つ方がいいかもしれない。その方が本當の修業になるばあひもありそうです。いろいろのことはありましようが、要するに、せつかくの一生だ。下らなく送つていいならともかく、人間の可塑性に今少しく信用をおいて先へ進みたいものです。一つの大きな目的へたどりつくためにはさまざまな修業を平行させていくことが必要でしょう。

學問や教養を邪魔物扱いにする考え方が文藝家の中にあるよう

だ。いわゆる教養が人間の價値を定める第一の標準でないことはもちろんです。それが邪魔になるというのもわからないことだと考へてきました。そうは思ひながら、ここ二三年の間、恥ずかしいことだが、たえずこのつぶやきに脅かされてきました。

今にしてわたくしは、この考え方がけつして一般的なものではなく、これをすべての文藝家にあてはめるのも全くいわれないことであると確信しうようになりました。ゲーテや鵬外を例に引くまでもない。教養に悩むとは、結局教養が身につかない人の悲鳴です。また教養を蔑視するとは、いたるところに瀰漫している俗人根性の天の邪鬼です。教養を重荷と感ずるのも、教養におごつて眼を曇らすのも、罪は當人にある。むしろ他の何物かがその中に缺けているのが悪いのでしよう。もし過剰を感じたら、過剰と感じないだけに他の要素を大きく育てるがいい。

こういふ奇怪な問題は、錯雜をきわめた現代病患者の頭の中にしか起こり得ません。教養があるならあるで、自分の得た教養を有難く思うがいい。「教養さえなければ」^たという愚痴はあまり愉快ではありません。文藝家に、何か特殊の不幸、何か異様な缺陷が必要のように漫然と思ひこむのはもつとも悪質な錯誤です。ある見方からいえば不幸や缺陷は必要どころか遍在するのだ。もともと一般的な不幸や缺陷がわが身のこととしてわかるからこそ、文藝などに氣をひかれるのでしよう。そういうものに縁のない文藝があつたら、むしろ結構なことに相違ありません。強いて自己を歪めようとする錯誤は、特別な例外はありましようが、かえつて單に凡庸な不具を生むにすぎない。先ごろ偶然眼に觸れたユーージェヌ・カリエールのことを引きましよう。

「浪漫的なはりに乗つて、藝術家は自分が通常の生活の外にあると思ひこんでいる。そして一般公衆もまた、同じ理由でそのように藝術家を認めてゐる。しかし藝術は生活を表現する手段である。全く生活に關與しないでなんととして生活を表現するのか。過去のあら

ゆる藝術家は、萬人の生活を生活した。彼らはそれを自分たちの業績の中に表明し、人間の徳が、すなわち藝術家の美德であることをわれわれに證明している。

理路整然は詩人のことである。支離滅裂はいわゆる俗人根性の特質だ。天才は、感情の深さの中に、いつそ普遍的な自然の諦觀の中にある。凡庸は、自然法則の無理解と、人工的に自分の同類から離れようとする欲望との中にあるのだ。」

重荷を捨てて身輕になろうとする前に、重荷と感じないだけの強健な肩を作りたひものです。

川端康成氏は、いわゆる新人の意氣地なさを嘆いて、「ヴァレリーやジードをありがたがるより、下らん女に惚れて、こつびどい目にあう方がよろしい」と放言したいといつておられる。藝術派の新人が生活からそつばを向いてしまつたという觀察はある意味で正しい。しかしこの御忠言は同じく一面の理はあつても無駄なことです。なんとすれば若い文藝家の多くは、すでにそのとおりのことを實行しているのだから。要は、外國人の書いたものに惚れようと、下らん女に惚れようと、それが白々しいか白々しくないかということにあるのでしよう。

いかにも初夏の新聞雑誌は、いわゆる既成作家の新人待望の聲に満ちています。ずい分大勢新人が出たはずだが、早くも沈滞したのでしようか。一體新人などというものが、^た筒の化け物のよう、そうによきによきと出るものとは思えません。それに、見どころのある新人が現われれば、わいわい騒がなくても自然に頭角を現わしてとにかくある水準線上に既成作家と肩をならべる。批評の標準が動揺しているだけに、特殊な作家もまた出やすくなつてゐる今日だ。かなり普遍性に乏しい作家までが、なんとか發表の機會を得る現状から推して、多くの坊が誤つて取りあげられることはあつても、天下の逸材が全く埋もれ去ることはないと思われ。

一概に新人とはいいますが、浮かび出るまでにはいずれも相當に

苦勞しているはずで、全部とはいませんが、このごろの既成作家の作家志望者に對する毒舌だけを聞いていると、到底見こみのない劣材をいたずらに足蹴にしているような感じがなくてもない。先輩に阿諛し、同輩を嫉視し、小名聲に憧れて得ればたちまちに自足し、あるいは生活に背を向けているような似而非作家志望者に何が期待できましよう。われわれの年代も、すでに若干の有力な新人を送り出しています。彼らは、埋もれていた時代にもけつして昨日の既成作家をなまば落膽させ、なまば安心させるような手合いではなかつた。また、同じように出発しながら、途中で怠けた連中は皆だめになつていきます。もし明日の新人がいれば、既成作家の作品に對しても、正常な評價以外になんのひけ目も感ぜず、彼らのことはに苦笑しながらすでに替々と他日の準備に力を盡くしているはずだと思えます。こういう歴史は、例外なしに永遠の順送りをくりかえしてきます。ポードレルの『青年文學者への忠言』は依然として新しい。否、あらゆる大才の自戒ないし助言はけつして古くならない。否、そういうものをせせら笑う連中が落伍するのだ。あらゆる笑いのうちで、もつとも自分を害するのがせせら笑いです。笑われた方は、それをきつかけに心をひきしめることもありましようが、笑つた方は助からない。

偶然生えた茸は土地が乾けば枯れてしまいます。そういう運命も悪くないというならそれまでのことです。喬木の芽が少し木らしくなると、すぐ既成作家としていつころ珍らしがられないのも奇妙なことだと思えます。運動の選手でさえ大學へはいつて一年間は全くのフレッシュマンだ。狭い文壇という特殊地域から見ればともかく廣い讀者層の眼からは、かなりの古狸までが新人に見える。一生を賭する文藝の道だ。名を知られてから五年や十年はほやほやの新人に相違ない。彼らもまた理想の讀者の無言の批評におそれ替々と自分の仕事の小を補うのがほんとうでしょう。わたくしは今の日本の文壇には有望な新人が雲の如くにいると思つて楽しみにしています。

大小への未練を捨てきれない御家人崩れみたいなことを云う、とおことばおもしろく讀みました。ある意味からいえば唾棄すべき侍根性があるのも確かだが、わたくしはどちらかといえは人情家だ。狐忠信に涙を出したり、獨歩の『春の鳥』に泣くような男だ。そうかといつて、「あの子もからだは弱いし、成績もかんばしくないから、まあ好きな道へ行かせようと思ひまして……」という、年輩の人々の間に未だに通用しているらしい方にはやはり閉口します。こんなことで藝術家の数がふえたら、藝術こそ迷惑な話です。身心薄弱な者が藝術に悪くはまりこむと身を殺すことになりましよう。身を殺しても浮かればいいが、藝術などに悪くかかり合つた喰いつめ者は一人でも少ない方が結構です。變な傲慢さがあるにきまつていきますから……。

もちろん、自分の分を守つて慎ましやかに仕事をしている姿は大好きだ。尊敬します。そういう姿を見ると、無理を重ねている自分のはねかえりをつくづく反省する。年老いた人の落ち着きにもむろん頭がさがる。しかし、年をとると、嫌でも應でも多少は弾力性や柔軟性がなくなるものらしい。病弱や貧困もひとつではないが、早老の慘をなぐるよりは、強健な、もし他の道へ行つても何事かを爲し得るような文藝家が、もつともつと大勢いてくれたらさぞかし頼もしいだろうと思ふ気が抜けません。

文藝家に限つて健康が恥ずかしいという世の中ならば、また何をかいいましよう。頼りなさは、人間そのものの中に、すでに條件的にじゆうぶんあるのです。

(一九三三年夏)

停滞時の豊饒